

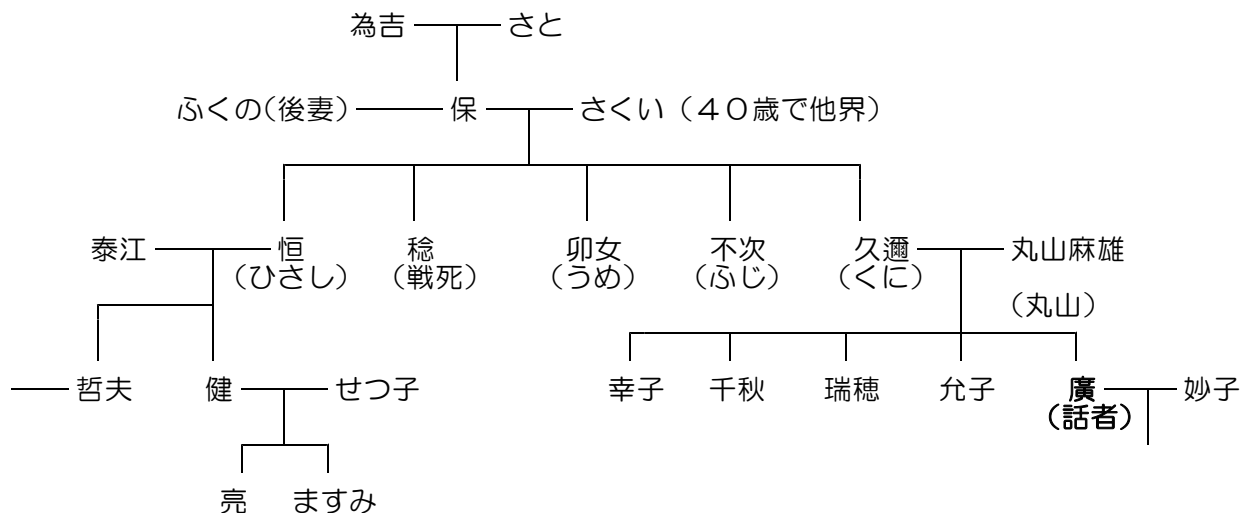
# 「諏訪形と里見弴」考

## 1 はじめに

「諏訪形誌活用委員会」では2022年6月11日、荒神宮で丸山廣さんから、主に「里見弴に関する思い出」を聞かせていただくことができました。丸山さんは窪田保（城下村最後の村長）の孫にあたる方で、里見とその関係者が諏訪形の「赤い屋根の家」に疎開してきた当時、保の家に住んでおられました。そのため、里見やその周辺の人々と直接ふれ合った経歴を持つ方です。

なお、当文書では『諏訪形誌』の記載に倣って、人名はすべて敬称略とさせていただきます。

## 2 窪田家の人々



### 主な人々

- |     |                                                                                                                         |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 保   | 旧城下村最後（上田市との合併時）の村長。後に上田市議会議員。城下保育園用地を寄付し、園長。保の葬儀の時は保育園児が公民館付近に並んで「園長先生、ありがとう」と保を見送った。諏訪形の地域活動などに関わって『諏訪形誌』には数多く登場する人物。 |
| ふくの | 保の後妻。さくいの死後、小泉から嫁いだ。城下保育園に勤務し、保の没後は園長。                                                                                  |
| 久邇  | 丸山廣（話者）の母。窪田保の長女で丸山麻雄に嫁いだ。                                                                                              |
| 卯女  | 窪田保の三女で里見弴の書生となった。                                                                                                      |
| 稔   | 久邇の弟（長男）。海軍軍人（戦艦山城の陸戦隊員）。戦死。里見弴が諏訪形を訪れた頃には亡くなっていた。                                                                      |
| 恒   | 久邇の弟（次男・末弟）。陸軍軍人で生還し、窪田家の当主となる。                                                                                         |
| 丸山廣 | 話者。窪田保の孫。                                                                                                               |



窪田保  
（諏訪形誌より）

### 【ちょっとコラム】

本稿と直接関係はないのですが、丸山（旧姓窪田）久邇の弟（丸山廣の叔父）、窪田稔は「長身で制服がよく似合う格好の良い海軍軍人」だったようです。諏訪形誌活用委員会顧問の北沢伴康は稔と面識があり「カッコいいので自分も海軍の軍人になりたい」とまで思ったと語っています。また、現荒神宮今井貴美宮司の叔母、志めは「多分この人だと思うけれど、その頃荒神宮にもお参りに来ていて、ものすごく格好よかった」と語ってくれました。

稔は戦艦山城乗務の陸戦隊員でしたが、戦死してしまいました。戻ってきた骨箱の中には「砂」だけが入っていたと、丸山廣が話してくれました。戦争の悲しさを物語るエピソードです。

### 3 『諏訪形誌』に見る「作家 里見淳と諏訪形」（諏訪形誌 174ページ）

里見淳（さとみ とん 1888～1983）は本名山内（やまのうち）英夫。小説家有島武郎の実弟で、人情の機微に通じた、屈託のない語り口の巧みさが特色の小説家です。

里見は、太平洋戦争末期の昭和19年（1944）5月1日、身のまわりの世話をしてくれる遠藤喜久、家事を手伝う老女とともに諏訪形1011番地の小早川家に疎開し、同年11月まで滞在していました。喜久と老女はその後も小早川家に残りました。

小早川家への疎開を導いたのは、三井（旧姓窪田）うめでした。うめは少女時代から文学に長じていたことから、一時期「女書生」として里見宅に住み込んでいました。



里見淳と遠藤喜久  
（イラスト：照井正夫）

里見の小説『姥捨』は、諏訪形に滞在していた10か月間に出会ったいろいろな事柄を中心に書かれています。また喜久は、昭和21年（1946）10月31日まで諏訪形に滞在していました。鎌倉に住んでいた里見は、その間ほぼ毎日、喜久との間で手紙を交わしており、それらを収めた『月明の径』も出版されています。これらには、戦中から戦後にかけて諏訪形の人たちの日常の暮らしや、地域で起きた出来事などが記載されているため、当時を知るための格好な資料といえます。

里見は諏訪形滞在中、窪田家の人たちに歓待されたり、また、産土神の諏訪神社や荒神宮の境内で近所の子どもたちと遊びに興じたりしていたことも伝えられています。



また、里見がこの地に滞在していたことから、著名な作家や文化人が彼の元を訪れていました。神科の新屋に疎開をしていた漫画家の横山隆一や作家の久米正雄、佐藤春夫などが里見を訪問しています。また、敗戦間近の昭和20年（1945）5月17日には、作家の舟橋聖一が女性とともに訪れています。昭和23年（1948）、舟橋は里見を尋ねた時のことを元にした小説『千曲川』を発表しています。

里見が疎開した小早川家は、当時「傾いた門構えで、赤く塗ったトタン屋根の二階建ての家は目立つ建物であった」と、小説『姥捨』の中に描写されています。なお現在、この場所（城下駅から100メートルほど東寄り）にある家は建て替えられていて、当時の面影はありません（上の写真参照）。

参考文献『上田市誌（上田の風土と近代文学）』

#### 【『諏訪形誌』発刊後にわかったこと】

『諏訪形誌』本文には「里見淳は1944（昭和19）年5月1日に女性二人を伴って諏訪形を訪れ、11月まで滞在した」という記載がありますが、誤りであることがわかりました。里見が女性二人と諏訪形を訪れたのは1945（昭和20）年5月1日のことで、この時は数日間滞在しただけで鎌倉に戻っています。その後も何回か諏訪形を（と言うより遠藤喜久（お良）のもとを）訪ねていますが、それほど長期間滞在したことはなかったようです。

### 4 里見淳・遠藤喜久（お良）と上田市諏訪形の接点

#### 里見淳 略歴

- ・1888（明治21）年、実業家有島武と、3番目の妻幸（幸子とも）との間に四男として誕生。
- ・長男武郎（小説家・1878年生）、長女愛（1880年生）、次男生馬（本名壬生馬 画家・1882年生）、次女志摩（1884年生）、三男隆三（1885年生）
- ・生後すぐに山内家の養子となったが、養母静とともに有島家の実父母の元で育つ。養父の山内英郎は1888年に死去。
- ・学習院初等科、中等科、高等科から東京帝国大学文学部英文科に進むが短期間で退学。
- ・志賀直哉、武者小路実篤らが創刊した『雑誌白樺』に兄二人と共に参加。また、後に吉井勇、久米正雄らと雑誌『人間』を創刊。
- ・1915（大正4）年、山中まさ（1898年生）と結婚。
- ・1933（昭和8）年には妻まさ、遠藤喜久と「文士賭博事件」で逮捕されたが、菊池寛の取りなしで釈放され、罰金刑となる。
- ・1945（昭和20）年、遠藤喜久、初を上田市諏訪形に疎開させる。同じ年、川端康成らと「鎌倉文庫」創設に参加。日本芸術院会員となる。
- ・その後鎌倉に住み、小津安二郎監督と組んで映画製作にも関わる。
- ・1959（昭和34）年、文化勲章受章。
- ・1983（昭和58）年、鎌倉市で没。

【コラム 「里見弴」のペンネーム】

里見弴のペンネームは「電話帳をペラペラとめくり、指で「トン」とついたところが「里見」姓であったため」と伝えられています。二葉亭四迷のペンネーム命名エピソードなどとも通じるところがあって、何となく当時の「文士」の気風を感じることができるようにも思えます。

【もうひとつ ピント外れのコラム】

1960年代、「日本には「いくま」という名前の立派な人が3人いる。ひとりは「有島生馬（画家・里見弴の兄）」、もうひとりは「團伊玖磨（作曲家・エッセイスト）」、残りのひとりは私「山岸いくま」だ！」と話している先生がいました。山岸いくま先生も地質学の分野ではちょっと名が知られた人です。上田高校の正門をナナハンで入ってくる老人・山岸先生（当時高校生の編者には「高齢者」に見えました）のお姿はなかなかドラマチックでした。

遠藤喜久（1895年（明治8）～1952（昭和27）年）

赤坂の藝者で「菊龍」と名乗っていた。三井財閥の中上川次郎吉が旦那で、里見と出会った頃には二代目市川猿之助（のち初代猿翁）の愛人だったが、里見は猿之助から菊龍を奪ったかたちとなった。その後、里見は喜久が亡くなる1952（昭和27）年まで、ほぼ生活を共にした。通称お良。

里見弴・遠藤喜久（お良）と上田市諏訪形の接点

（小谷野敦（1962～ 比較文学者）「里見弴・詳細年譜」による。※は編者注）

- 1945年 5月 1日 里見は窪田卯女を頼って信州上田市諏訪形に遠藤喜久（お良）と初を疎開させ、同行する。
- 5月 8日 里見は深夜、諏訪明神に二人のことを祈る。  
※「諏訪明神」は「荒神宮」の可能性あり。
- 9日 里見、遠藤喜久（お良）と初を残して帰京。
- 11日 遠藤喜久（お良）より書簡、「旦那さまは大変な人気」。  
※後に「月明の径」となる往復書簡の第一報か？
- 7月14日 里見、鎌倉文庫へ行き、久米正雄、加藤六蔵、国木田独步、永井荷風らと夕飯。
- 17日 舟橋聖一と香代子が遠藤喜久（お良）を訪ねる。  
※『諏訪形誌』では5月17日となっている。
- 9月21日 里見が上田諏訪形へ。
- 24日 横山隆一來訪。
- 26日 千田是也來訪。
- 27日 横山、千田と南佐久中込に田村秋子を訪ね、三反田に疎開していた有島生馬（里見の兄）を訪ね泊。
- 28日 里見、諏訪形に帰る。
- 10月 6日 里見、鎌倉に帰る。
- 10月23日 小早川の家主が死去。
- 25日 遠藤喜久（お良）が鎌倉へ。
- 11月 8日 遠藤喜久（お良）だけが再び諏訪形へ。この頃『姥捨』は書き始められていた。
- 12月18日 『姥捨』脱稿。
- 1946年 1月28日 里見、上田へ。
- 2月 1日 里見、鎌倉に帰る。
- 11日 遠藤喜久（お良）が鎌倉へ。
- 3月21日 遠藤喜久（お良）が上田へ。
- 4月16日 里見、上田へ。
- 24日 田村秋子が来て泊まる。
- 26日 里見、伊那で講演の後、諏訪に宿泊して鎌倉へ。
- 7月11日 田村秋子が遠藤喜久（お良）を訪ねる。
- 15日 遠藤喜久（お良）が鎌倉へ。
- 19日 里見と遠藤喜久（お良）、東京劇場で新派「姥捨」（筒井順脚色）を観る。
- 9月 「皐月晴（姥捨）」を『文藝春秋』に発表
- 10月22日 遠藤喜久（お良）が上田へ。
- これ以降、本資料には「上田・諏訪形」に関する記載なし。

※『諏訪形誌』では遠藤喜久（お良）の上田滞在は1946年10月31日までとなっている。

里見弴は窪田（三井）卯女のすすめに従って、遠藤喜久（お良）と喜久の身のまわりの世話をしていた女性（「初」という名前のようですが姓は不明）を疎開させました。この時里見は、短期間（5月1日～9日）ながら諏訪形に滞在。その後も何回か諏訪形を訪れています。

上田への旅の様子や諏訪形での生活は小説「姥捨」のベースとなっています。なお、「姥捨」とは「二人の女性を（諏訪形に）捨てる」という意味であると思われます。以下に里見弴の「姥捨」から引用します。

…さういふところ（注：上田市諏訪形）に、晋策は、二人の、因縁浅からぬ「姥」を捨てに来たのだ。捨てに？さうだ、少しでも生きる可能性の多いところに捨て置くためだ。内心はともかく、鼻息だけは今なほもの凄いい軍部のことゆゑ、なかなかもって降伏など思ひもよらず…

## 5 丸山廣の思い出

### ○長野市から諏訪形への転居

- ・私は家族といっしょに長野市内に住んでいた。父（麻雄）は出征していた。
- ・当時住んでいた長野市内の家が取り壊されることになり、母の妹、卯女のすすめによって母の実家（諏訪形 窪田保の家）に引っ越した（当時の家主からは「出征兵士の家族を追い出すようで申し訳ない」と謝られたように記憶している）。この家で祖母（ふくの）、母（久邇）、卯女、私と4人の妹で住むことになった。



### ○卯女について

- ・卯女（叔母）が諏訪形に帰ってきたのは私（丸山廣）が小学校4年生の時だと思う。

※丸山廣の「小学校4年生の時」は1945（昭和20）年。

### ○里見淳は私（丸山廣）が小学校4年生の時に諏訪形にやって来た。

- ・里見は二人の女性を伴ってやって来た。
- ・私の尻に「おでき」ができたとき、里見が「手かざし」のようなことをして治療してくれたことがあった。
- ・里見は私たち兄妹を伴って散歩をした。荒神宮に散歩した時のことが小説『姥捨』の中に出てくるのだが、「妹たちと行った」とされていて、その中に私は出てこない。「小説家というものは嘘を書くものなのだ」と思った。また、「里見は男の子のことは眼中にないのか？」とも思った。
- ・「小説は作り事」と思ったが、中には「上田中学校の火事」など本当のことも書いてあった。
- ・しばらくして、里見は女性二人を残して東京（鎌倉）に帰って行った。

### ○遠藤喜久の印象

- ・あまり話したことはなかった。
- ・若くはなかったが、とてもきれいな人だった。
- ・歩き方なども地元の女性たちとは違って、腕を胸の前で組み、下駄の前歯でコチョコチョコ歩いた。
- ・働いているところは見たことがなかった、生活感はない人だった。
- ・里見のことばかりを考えているような人だったように思う。

### ○「月明の怪一弾・良ころの雁書」（1981（昭和56）年 文芸春秋社）について

- ・これは小説ではないので、すべて事実で、実名で書かれている。
- ・良さん（遠藤喜久）は毎日、身のまわりの出来事を手紙に書いて里見に送っていた。
- ・事実が遠慮なく述べられているためか、母（久邇）は「あの本はいやだ」と語っていた。

## 6 諏訪形の里見淳・遠藤喜久を訪ねてきた人々

- ・久米正雄（1891～1952）…小説家、劇作家。上田市生まれ。小学校長だった父が学校火災の際、御真影を焼いてしまったことで自殺したため、7歳で母の故郷、福島県安積郡桑野村（現在の郡山市桑野）に転居。
- ・田村秋子（1905～1983）…新劇女優。文学座の結成に参加。後に文学座の名誉座員。
- ・横山隆一（1909～2001）…「ふくちゃん」などで知られる漫画家。丸山廣は「話がとても楽しかった、ふくちゃんやおじいさんの「切り紙」を見せてくれた」と回想する。諏訪形には何回も訪れていた。
- ・千田是也（1904～1994）…新劇俳優、演出家。俳優座の創設者。本名伊藤圀夫。
- ・舟橋聖一（1904～1976）…小説家。
- ・田河水泡（1899～1989）…「のらくろ」などで知られる漫画家。丸子に疎開して来ていたが、諏訪形を訪れたかどうかは不明。

## 7 諏訪形と関わりがある里見弴の著作

### ○小説「姨捨」

- ・里見弴らの東京から上田への旅や上田での生活をベースとした小説。
- ・登場人物や出来事については、事実に基づくものも多いものの、当然「作られたもの」や事実と異なる部分も多く、前述のとおり丸山廣は「小説家というのは嘘を書くのか」と思った。
- ・「姨捨」の中で（里見をモデルとした）主人公が「子どもたち荒神宮で遊ぶ」というシーンが出てくるが、この「子どもたち」とは廣とその妹たちのことと思われる。実際、当時子どもたちで「里見と遊んだ」という記憶を語る人はいなかった、と北沢伴康諏訪形誌活用委員会顧問（1933（昭和8）年生まれ）が話している。
- ・「上田中学の火災」など、歴史的事実も物語の中に織り込まれている。



### ○「月明の徑一弴・良ころの雁書」（1981（昭和56）年 文芸春秋社）

- ・里見弴が90代になってからの回想録。人々が実名で出ている。
- ・1945（昭和20）年5月から翌年の10月までの弴と喜久の往復書簡も収められている。



終戦前後の信州・上田と鎌倉の往復書簡集。主に収められている良さんは所謂二号さんなのだが、疎開先でも近所の畑を手伝うなど朗らかにしている。一通毎の異様な長さは、帰宅した夫に朝からの出来事を逐一言いたい妻そのものだし、次にいつ書けるか分からない時代の現れでもある。

8月15日その日その直後の都心と地方の様子が各々具体的に書かれていて面白い。進駐軍に鎌で応戦するという男達を「内弁慶」と喝破するなど、お良さんの観察はクール。きっと会話の楽しい人だったのだろう。歴史的な記録としての価値とともに、慈しみの詰まった一冊。

「読書メーター」の書評による